

もう一人のぼく



のまあ

一コマ・ストーリー部門優秀賞作者紹介

映介 えいすけ

1990年6月16日生まれ
大阪府在住。大学でビジュアルデザインと立体造形を勉強しています

受賞の言葉

今まで漫画作品の投稿は全くの未経験だったので受賞を知った時はまさか自分が、と受賞の喜びよりも驚きの方が大きかったです。

この作品は「現代の若者たち」をテーマにしています。自分もその若者の一人であり、だからこそ表現出来るような客観性を意識して描きました。この作品を見てくださる方々に何かしら伝わるものがあれば幸いです。

今回の受賞が絵を描き続ける為の意欲と活力になりました。これからも自分らしい表現で描いていきたいと思っています。ありがとうございました。



孫 承衍 Seung Yeon

1986年生まれ
韓国在住の学生

受賞の言葉

アジアの文化を共有するという、このイラスト漫画賞の目的に触発されて応募しました。公けの場で自分の作品を発表するのは初めての機会なので、とても嬉しく、また誇りに感じます。アジアの国々にはそれぞれ固有の習慣があり、私はこれらの文化的背景にとても興味があります。例えば日本には「侍」という有名な武の文化がありますが、韓国には「ソンビ」という高い志を持った学者・文人階層がいました。

また、昔の韓国では結婚は家同士の取り決めであり、女性が男性より年上だということもあったようです。成熟した女性が、年若い少年を夫として暮らすのはどんな風であったかと想像してみました。夫婦というより、姉弟のような関係だったのではないのでしょうか。

漫画を描くという作業を通じて、単に視覚的イメージや商品を読者に与えるのではなく、私の本当の気持ちや考えを多くの人と分かち合ってコミュニケーションしたいと思っています。



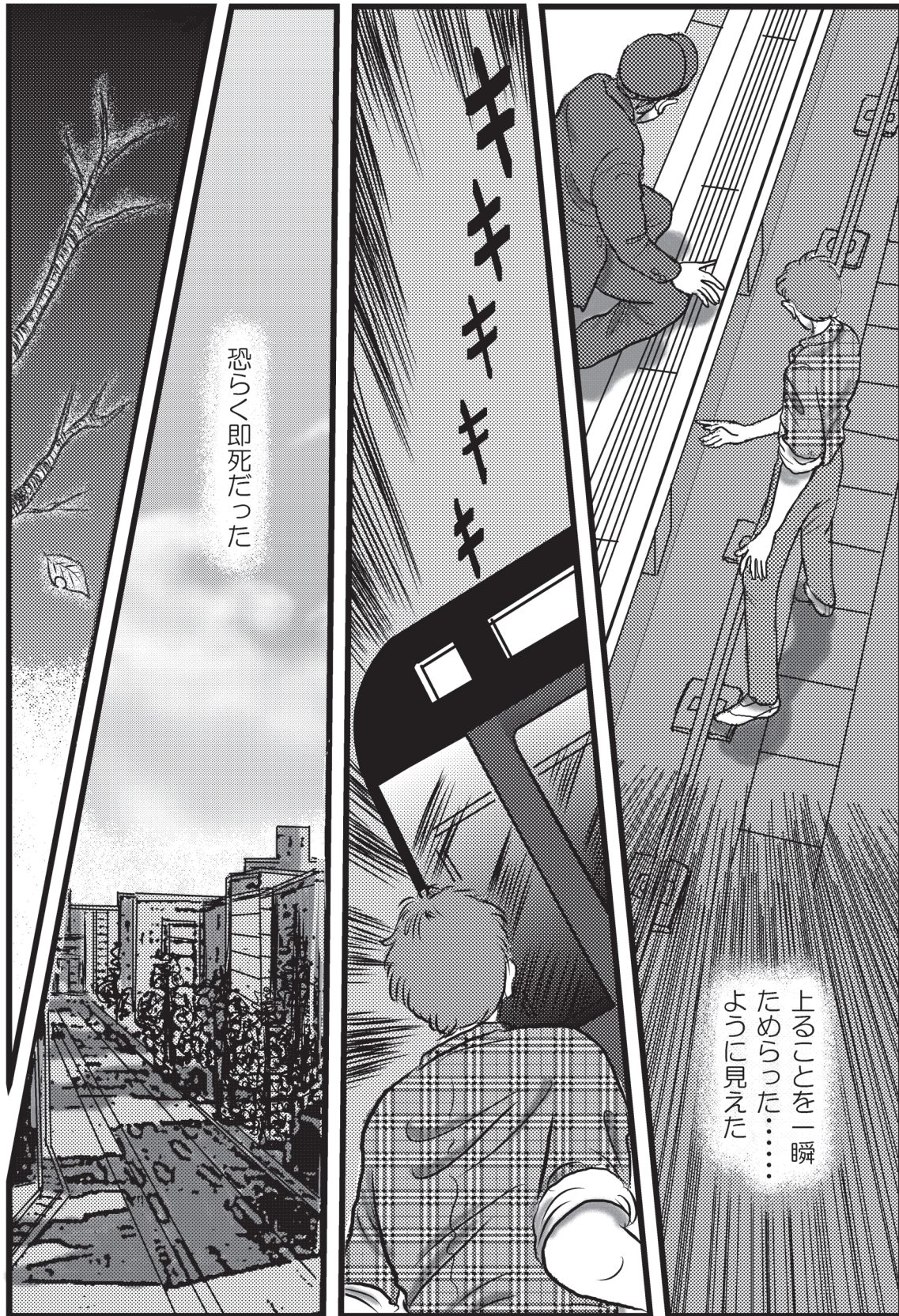
のまあ

名古屋生まれ 昭和58年から62年まで名古屋大学大学院文学研究科研究生
名古屋文理短大の講師、新城大谷大学の教授を経て、現在は愛知県医師会の総合政策研究機構に在職中 専門は心理学 (Ph. D)
マンガによる著書は「JUN<青春のエチュード>」日本文化科学社 (平成4年) など

受賞の言葉

このたびは、優秀賞という素晴らしい評価を与えていただき、誠にありがとうございました。審査員の皆様方に深く感謝致します。

本作品は、児童虐待と多重人格に関わる重いテーマを扱っています。読後に「やるせない」感情を持っていただくことを意図して描きました。もっとも、描いている方も気分は落ち込みます。できれば今後も、このようなテーマを基にマンガを描き続けたいと考えております。改めて、ありがとうございました。



恐らく即死だった

上ることを一瞬
ためらった……
ように見えた



地下鉄のホームで事故があった
人身事故である

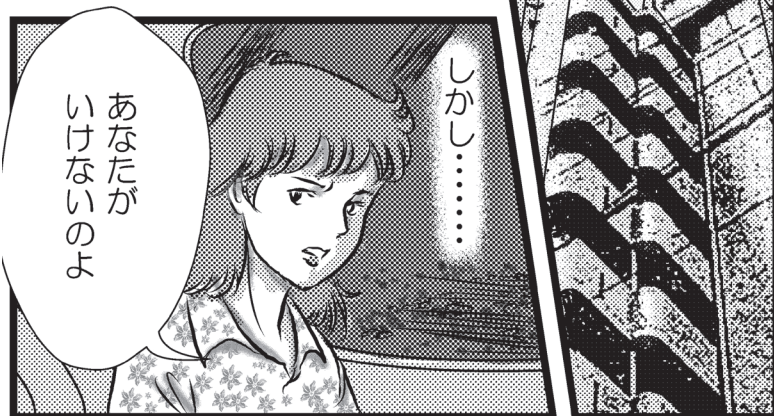
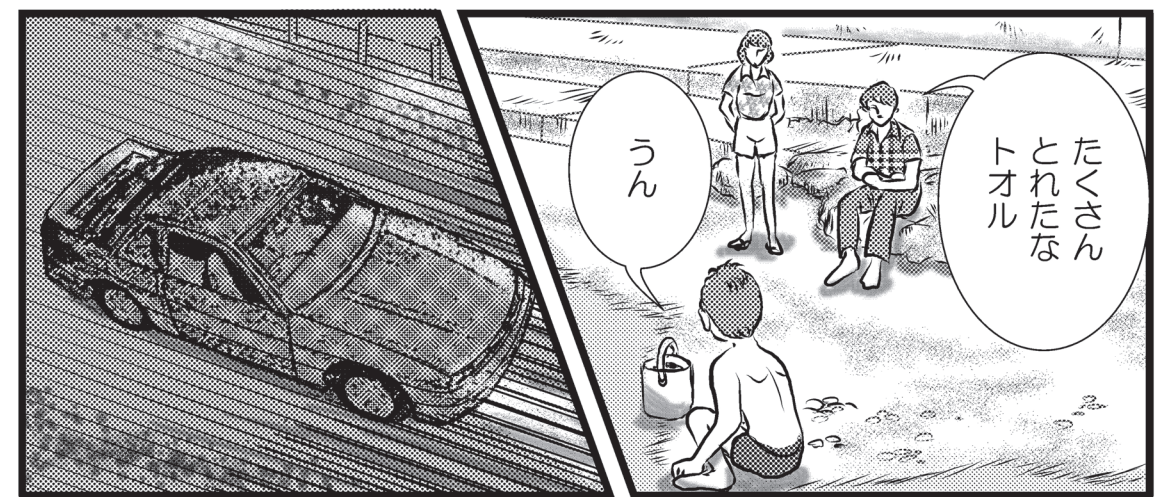
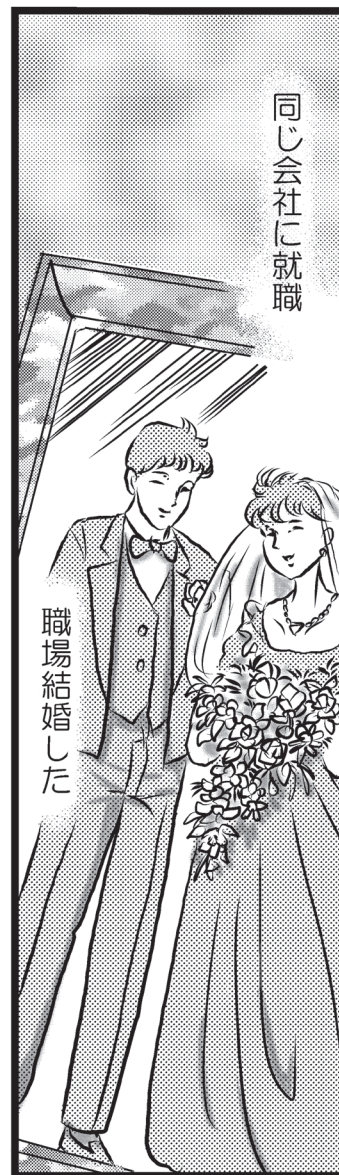
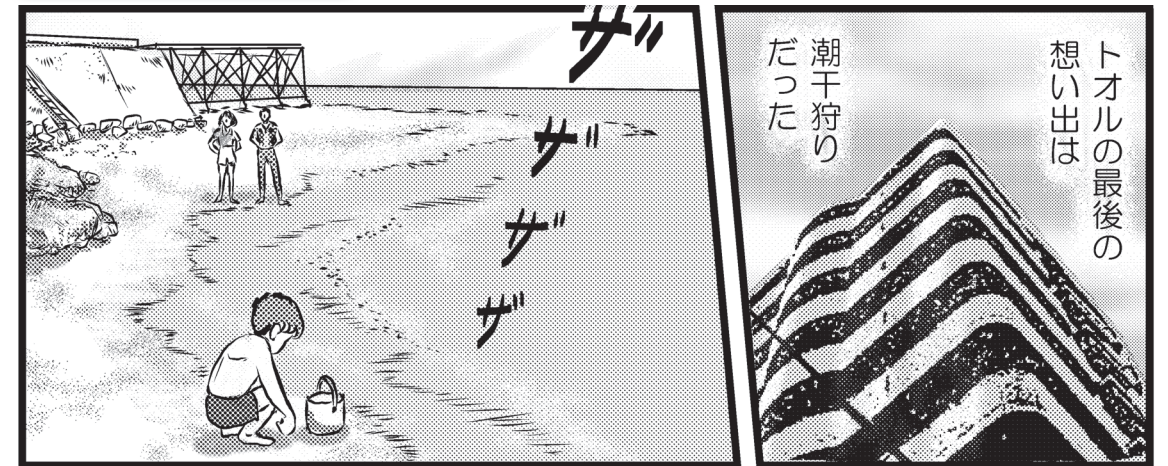
子供が誤って転落した
それを助けようとして
一人の男が線路に降りた

早く
上れ

子供は
助かった

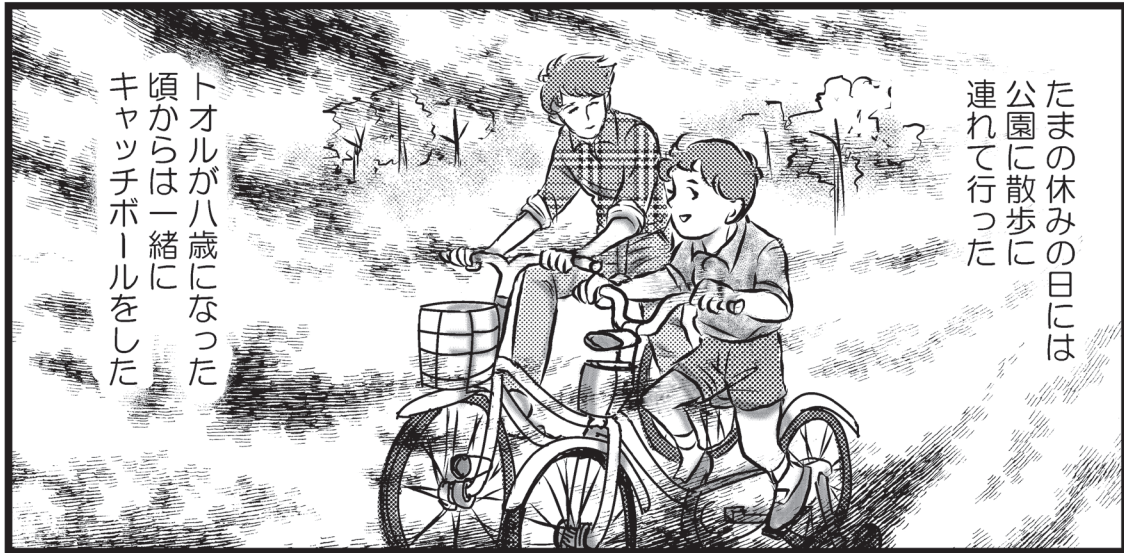
しかし
なぜか男は

電車が来たぞ



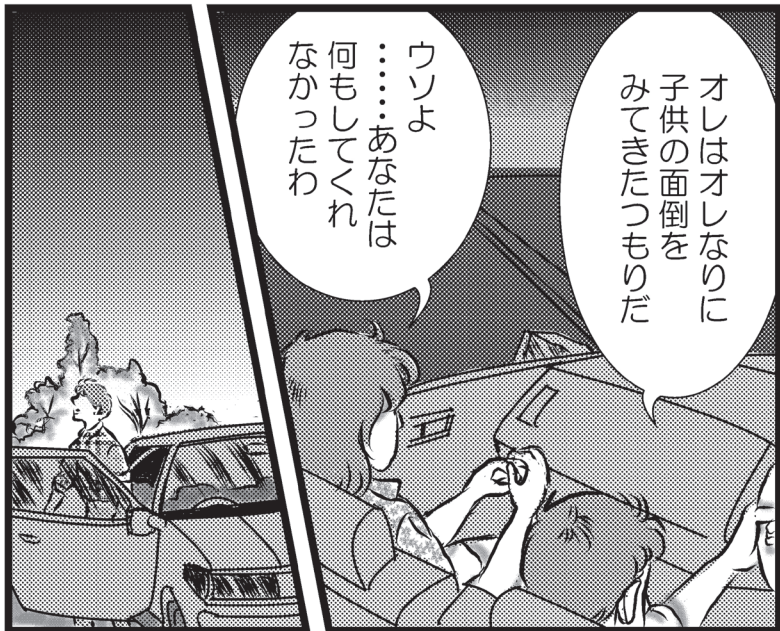


彼は自分なりに
子育てに協力して
きたつもりだった



たまの休みの日には
公園に散歩に
連れて行った

トオルが八歳になった
頃からは一緒に
キャッチボールをした

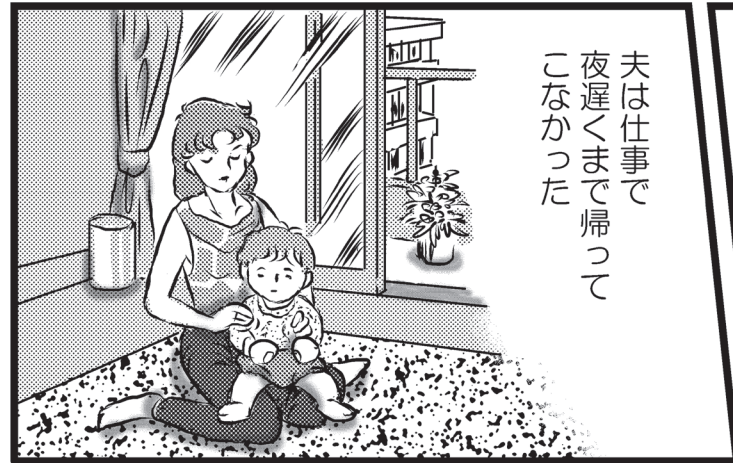


ウソよ
……あなたは
何もしてくれ
なかったわ

オレはオしなりに
子供の面倒を
みてきたつもりだ



彼には
妻の悩みがなんであるかを
理解できなかった



夫は仕事で
夜遅くまで帰って
こなかった



トオルの夜泣き

そして
彼女の慢性的な
睡眠不足……



マンションという密室の中の
子育ては
彼女が想像していた以上に
大変だった

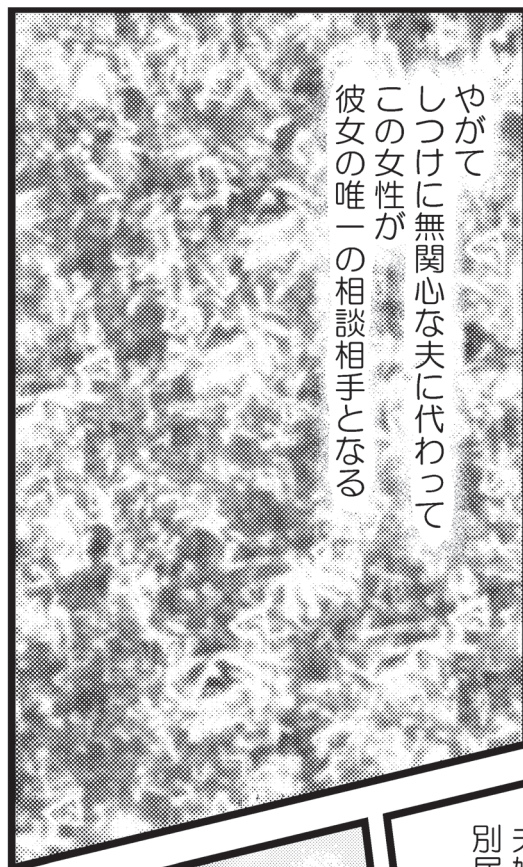


トオルがいくら泣き喚いても
夫は起きてこなかった

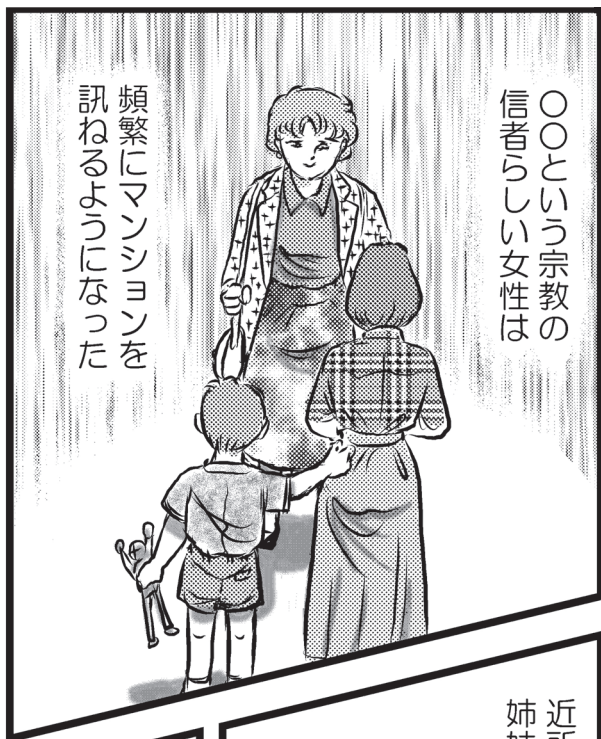
子育てに無関心な夫が
そこにはいた



こうして
彼女は夫に対する不満を
抑圧し続けた



やがて
しつげに無関心な夫に代わって
この女性が
彼女の唯一の相談相手となる



〇〇という宗教の
信者らしい女性は
頻繁にマンションを
訊ねるようになった



こうして
しつげの問題に他人がかかわるとい
異常な事態が……
この頃
夫婦の家庭内
別居が始まった

児童相談所

あの子は
怖い子です

ナイフが
鏡台に突き刺して
あったんです

近所に知り合いもなく
姉妹もいない彼女にとって



この女性は
もはや
姉のような存在だった



危うい家庭だったが
どうにか
均衡を保っていた



しかし
この女性の登場により
家族は完全に崩壊した

この子
また
お金を盗んだわよ

お帰りのさい



まあ
ふんふん
何を疑ってるの

……

数年前……



お一人？

旦那さまは
帰りが遅いの？

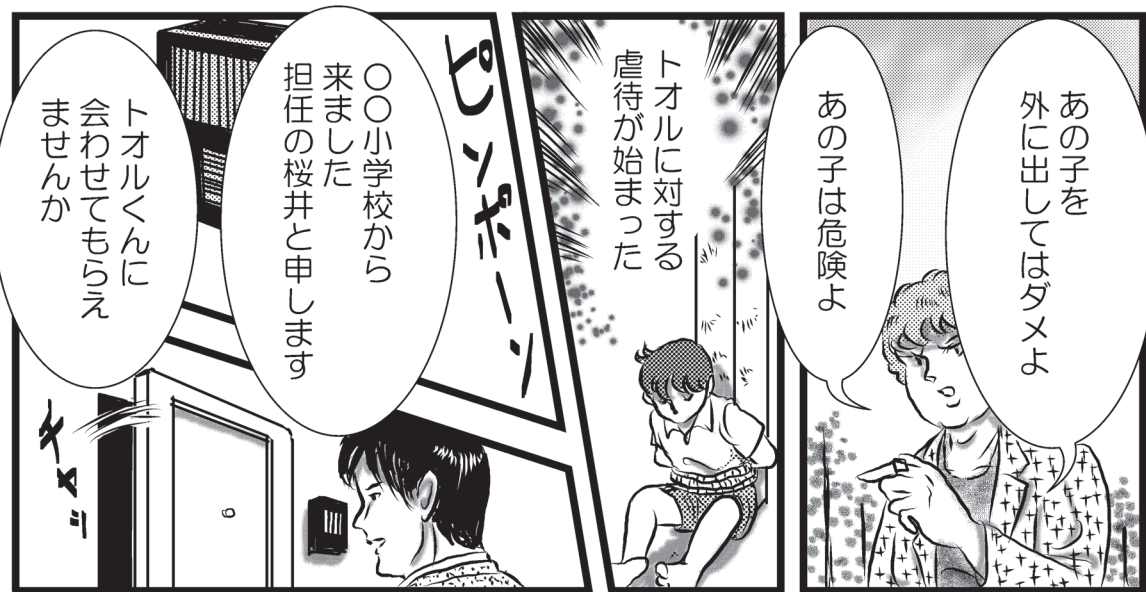
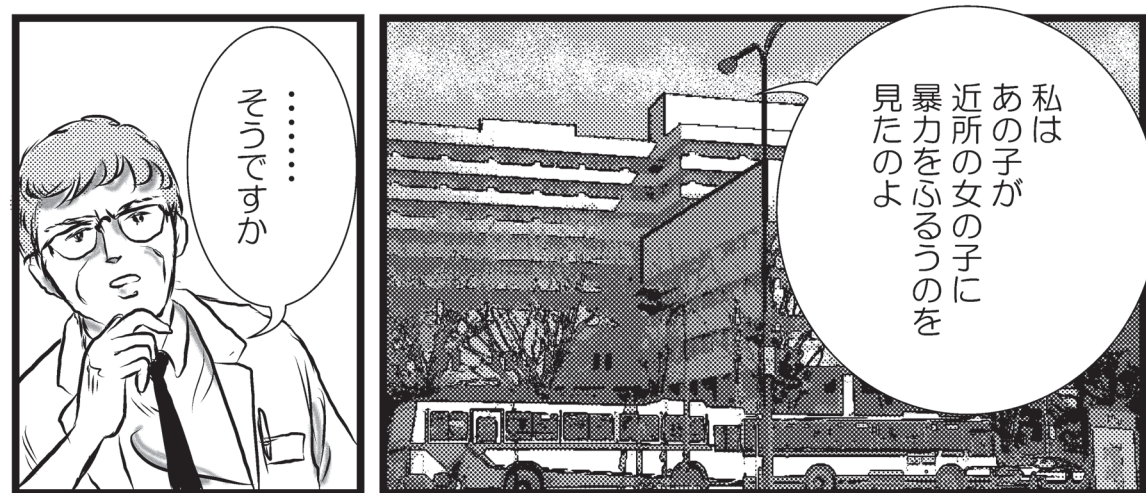
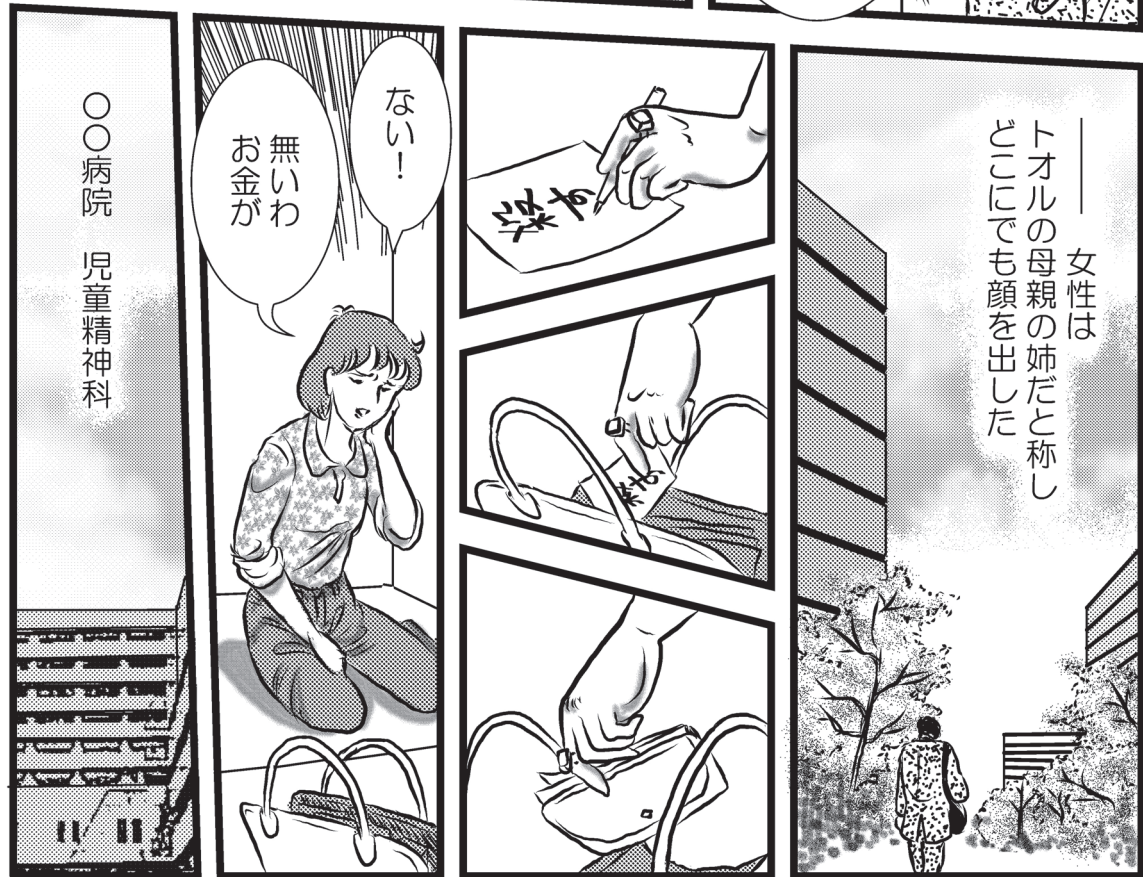
坊ちゃんか
いるの？

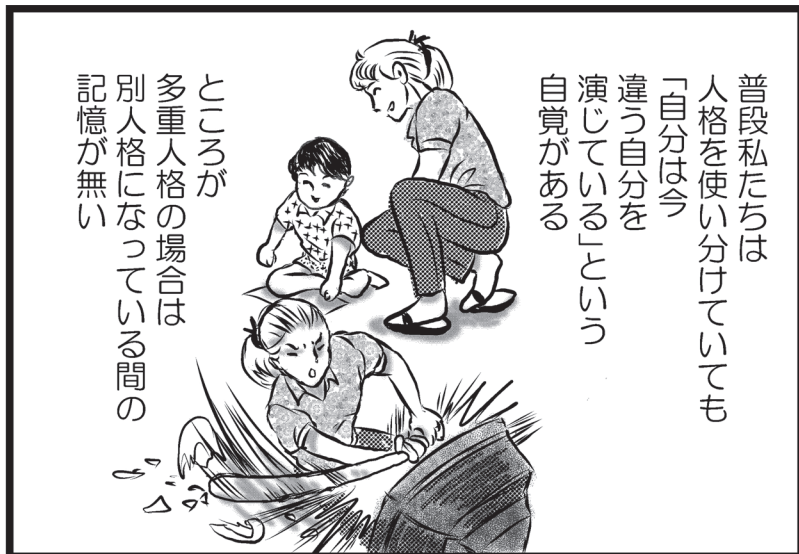
あのね
しつげは
厳しくしないと
ダメなのよ

これを見て欲しいだけ
何も売りつけは
しないわよ

世界の終末

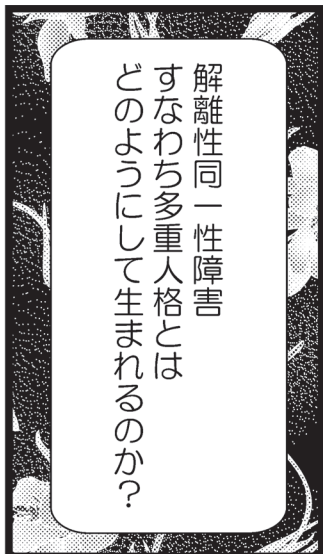
奥さん
手相を見てあげまじょう





普段私たちは
人格を使い分けていても
「自分は今
違う自分を
演じている」という
自覚がある

ところが
多重人格の場合は
別人格になっている間の
記憶が無い



解離性同一性障害
すなわち多重人格とは
どのようにして生まれるのか？



これが「解離」の
特徴である
多重人格者の多くは
幼児期(二歳から五歳頃)
に親から受けた
虐待により発症するこ
と考えられている

幼児期に虐待が
繰り返されて
トラウマを何度も
体験すると
心の防衛反応により
「解離」が生じる



トオルの場合は
暴力を振るっている間の
記憶が無いということで
多重人格とみなされた



親から虐待された子供は
苦痛から逃れるために
「トオル」で虐待を
受けるのは
別の子なんだ」と
思い込もうとする

こうして
別の人格が「解離」し
誕生する



……あの子が
怖い……



私のバッグの中に
この紙片が入っていて



息子が
お金を
盗んだんです

それに……



私は
あの子に
背後から
殴られた
んですよ

医者は
なんの疑いも無く
この姉と呼ばれる
女性の話を
信用した



トオルは
食事もなく与えられず
縛られた手足はやせ細っていた
父親は
母親と女性の目を盗んでは
トオルに会っていた
しかし
母親からなじられることを恐れて
なにもできなかった



トオルは
普段は
暴力行為を自覚していない
という理由で
解離性同一性障害
と診断された

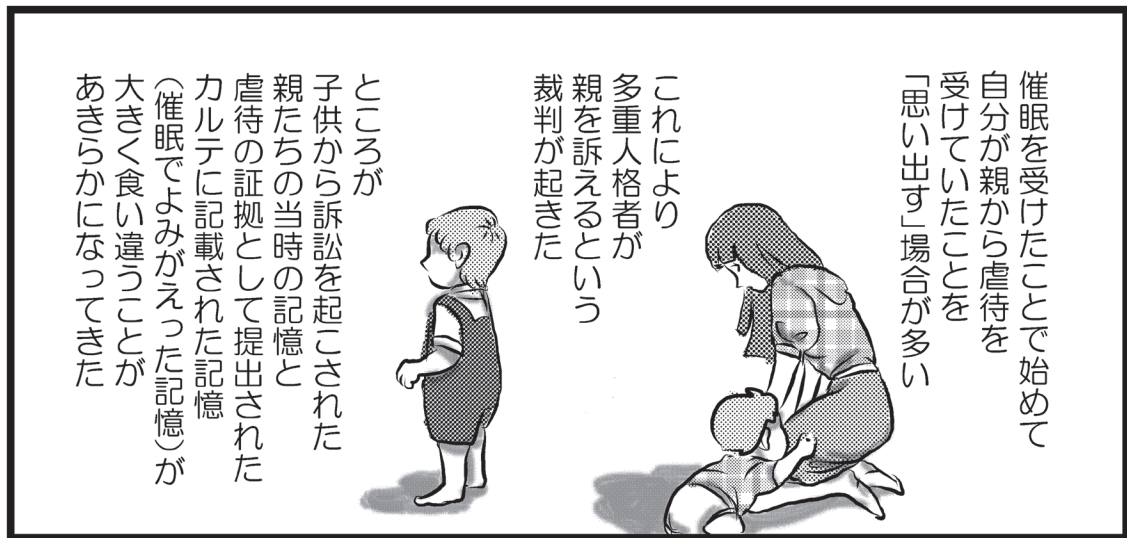


そこで
多重人格者の失われた幼少期の
記憶を掘り起こすために
退行催眠がおこなわれる

幼児期のトラウマの記憶は
思い出したくない記憶として
「抑制」のメカニズムが働き
封印されてしまう……



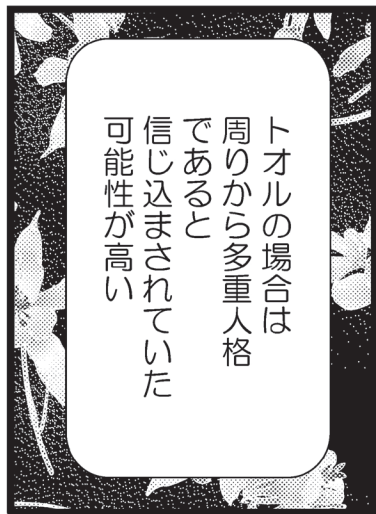
多重人格に共通するのは
幼少期の記憶が無い
ことである



これにより
多重人格者が
親を訴えるという
裁判が起きた

催眠を受けたことで始めて
自分が親から虐待を
受けていたことを
「思い出す」場合が多い

ところが
子供から訴訟を起こされた
親たちの当時の記憶と
虐待の証拠として提出された
カルテに記載された記憶
(催眠でよみがえった記憶)が
大きく食い違うことが
あきらかになってきた

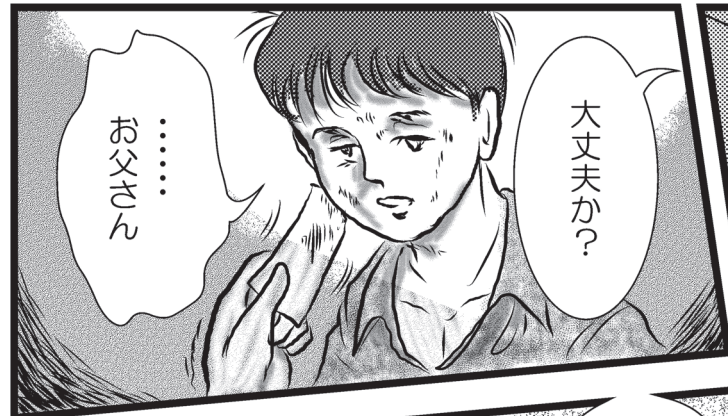


トオルの場合は
周りから多重人格
であると
信じ込まされていた
可能性が高い



これを「偽りの記憶」
という

じつは
催眠下では
患者は臨床家の
期待に添うよう「
ウソ」の記憶を
創り出してしまっ
た(本人はそれを
本当にあった記憶
だと信じている)

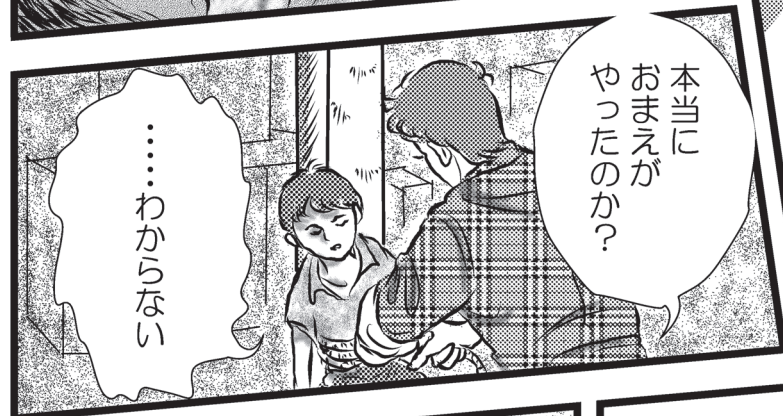


……
お父さん

大丈夫か？



トオル



本当に
おまえが
やったのか？

……わからない



……
いいよ
お父さん

ぼくは
病気なんだって

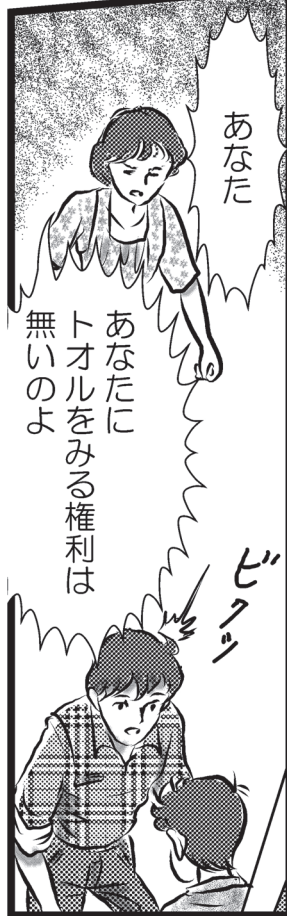


……ぼくの中に
もう一人のぼく
がいて
知らない間に
悪いことを
するんだ

……お父さん
ぼく 良くなったら
もう一度海に行きたい



ちゃんと
縛りなおして
おくのよ



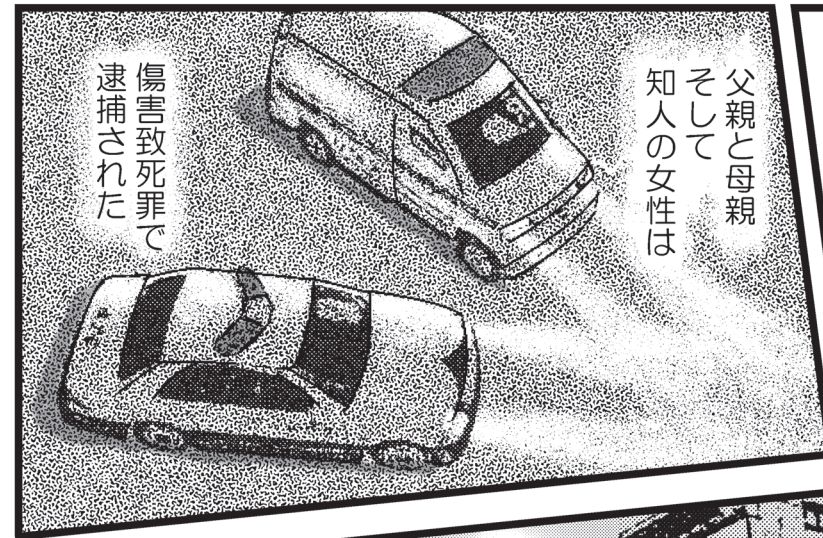
あなた
あなたに
トオルをみる権利は
無いのよ



上ね…いせ
ホームのトコ
もぐれ!

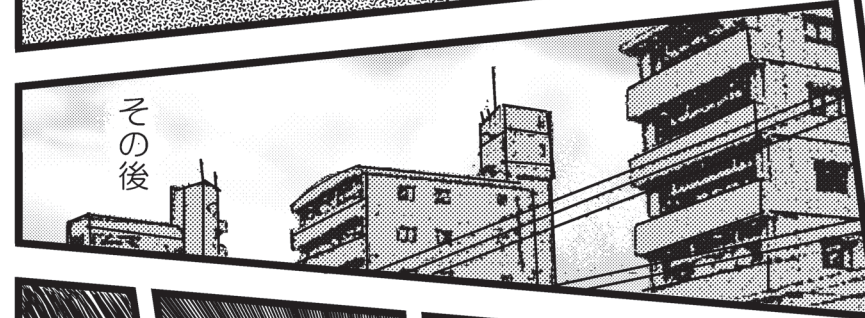
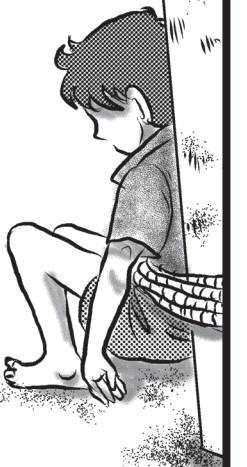


駅員さん
早く来て



父親と母親
そして
知人の女性は
傷害致死罪で
逮捕された

……翌朝
トオルは
息絶えた
享年
十歳



その後



オ父サン



トオル!



ココハ

トオル

静カタ……



オしがつもつと
しつかりして
いれば……

トオル……
お父さんを
許してくれ

子供が
落ちたぞ



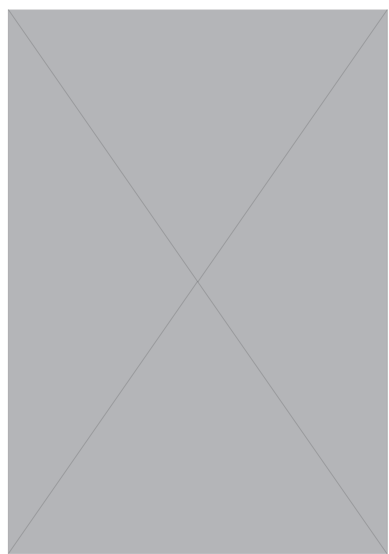
救えたはずだ



……父親は
処分保留で釈放された

●「断絶」107号（東京都）
 「断絶」はベテラン揃いのこくのある雑誌で、文章は練達の士が並んでいる。文章は手堅く、右顧左眈しない一つの覚悟が感じられる。古色の文章のなかに、骨のようなものがとおっている。ここまで文章が徹底していると、「断絶」という言葉をなぜ雑誌のタイトルにしたか、その由来を想像したくなる。下の世代との断絶を一つの姿勢と覚悟したか、社会への広がりを感じながら無視したか、いずれにしても筋金入りの強さを感ずる。

なかでも五十嵐崇の「遥かなる空の彼方に」は、文章の彫りは深く、岩肌を感じさせる骨張った文体は、抑制を徹底させたなかに象嵌された人間の復讐劇が、一つの超越と自然への高次の領域での同化が芸術を手段として達成されるドラマを内蔵していて、最後まで読ませる。絵の造詣も深さを感じる。恩讐を超えた芸術の極致はたしかに触れているが、ただ惜しいのは、最後に急ぎ過ぎていて、あまりに簡単に超越的な領域に到達しすぎる。芸術には表現としての苦悩もあるはずであり、その試行錯誤の苦しみの果てに到達するものが自然で、そのあたりのスプリングボードなしに一気に天上には行けないのではないだろうか。それにしてもこの彫琢は並々ならぬ修練の上に実現するもので、彫りの深さは骨太さに通じている。



●「文学若見沢」81号（北海道）
 地道に市民文芸の活動を底広く続けている文芸誌で、昭和四〇年から続く四〇年の営為は賞賛に値する。遅ればせながら祝意を送りたい。この詩は幅広いジャンルで、俳句、短歌、随筆、童話と多彩な賑わいを見せながら、その頂上は高く、注目すべき作品がレベルを引き上げている。

連載二回目「市来知の決闘」（こうでんじつ）は、第一回目にも注目したが、今回もそれ以上の興味深い内容で、記録的価値の高い史伝を含みながら、文学の

「オープンセットの街で」（武山博）も単なる船旅のレポートに終わっていない、視点の幅を感じるのも、普段から鍛えられている文章の編み目がしっかりしているからだろう。ピースポットと想像される、若者といっしょに世界の問題を考えながらの長い豪華な船旅が、注意深くよく観察されていて、なるほど納得させられることがしばしばである。連載の雰囲気もあり、おもしろいレポートになっている。

「断絶」には他にも「二度目の結婚」（吉田善穂）「シルバールーム・桜」（政所里子）などの連載があり、総じて長編の息の長い筆力が目立つが、どれも手堅い筆致で隙のない文章の流れを作っているのが、雑誌の一つの格調の高さにもなっている。

彫りとふくらみの豊かさを示して、価値あるものを提出している。前回は明治初期の九州の武士の反乱を描いて、その詳細さに感心したが、今回は鎮圧された多数の反乱者たちを国事犯として内地に収監しきれずに、北海道の市来知に開拓を兼ねて新しい収監施設を造ったという、成り立ちを明瞭に描いている。北海道の裏面史を摘出することによって、これまで描いてきた九州と北海道とが一つにつながり、スケールの大きな時空を構築した。これだけの詳述はどんな典拠を得ているのか、それ自体興味深いところだが、生半可な研究ではない土台の強固な拵えに、壮大な意図を感じる。極寒の収監所の様子や脱走の様子など、文学でなければ蘇生しえない術を見事に展開している。元新撰組組長永倉新八も登場して、興味を盛り上げ、剣豪の繋がりをあざなっている。後半は宝来又兵衛の四天流など幕末から明治の地方の剣術と剣豪の流れに重ねて、市次郎の剣術修行を筋よく描き、決闘への興味を盛り上げている。次回が楽しみである。

同人誌には、優れた歴史小説がある。現代の社会相だけが華やかな脚光を浴びるが、過去をしっかりと掘り起こして現代の背後に隠れた歴史層を確実に捉えておくことも重要な文学作業である。歴史小説や記録の分野に光を当てる推奨が樹立されるべきだと思う。

「家族写真（一）」（樽井英介）も北海道岩見沢の「倉澤写真館」の歴史を通して、過去に遡及する粗筋が骨格で、その点では歴史性に通じる性格を帯びている。同級生が召集前に結婚してその記念写真を写真館に頼みに来るというのは当時としてはよくあったことだろうが、いっしょに東京に行って三月十日の東京大空襲に遭うというのは、読ませる展開。私も東京空襲については、読んだり聞いたりしているが、ここまでのリアルな詳述はあまり出てこない。テーマや組み立ては平凡と言えは平凡だが、その誠実な姿勢と材料を素直に受け止める態度は好感が持てる。

